You, Unlimited

龍谷大学矯正・保護総合センター通信

Ryukoku Corrections and Rehabilitation Center（RCRC）News

RYUKOKU UNIVERSITY

きょうほごセンターだより

Vol.19

rcrc.ryukoku.ac.jp

〔発行日〕
2026年10月1日

〔編集・発行〕
龍谷大学 矯正・保護総合センター



2025-2026年の活動を振り返って

龍谷大学
矯正・保護総合センター長　浜井　浩一

矯正・保護総合センター長となって8年目を迎えました。慣例に従い2025年度を振り返りながら、この1年間のセンターの活動についてご報告いたします。

当センターは、矯正や更生保護に関する教育実践を担う「矯正・保護課程」と、研究活動を推進する「矯正・保護研究センター」を統合し、さらに社会貢献活動を加えた組織として2010年に設立されました。本年度も、「教育」「研究」「社会貢献」の三つを柱として、多くの皆様のご支援をいただきながら活動を進めることができました。

まず教育活動では、2025年度は社会学部の深草学舎移転に伴い、矯正・保護課程の開講体制を大きく見直しました。その結果、延べ受講者数は前年度より945名増の4,635名となり、3年連続で過去最高を更新するとともに、課程開設以来初めて年間延べ受講者数が4,000名を超えました。社会人向け「矯正・保護教育プログラム」においても、オンライン提供科目を拡充した結果、北海道から鹿児島県まで全国各地から171名の社会人受講生を迎え、こちらも3年連続で過去最高を更新しました。矯正・保護課程は、本学学生だけでなく、全国の矯正・保護関係者にとって学び直しの場としても着実に定着しつつあります。

また、施設参観や国家公務員採用試験合格者を囲む懇談会など、実践的な教育機会も継続して実施しました。その様子が、読売新聞の特集「キャンパス探訪」にて紹介されました。課程修了生は、刑務官、法務教官、保護観察官をはじめとする矯正・保護分野の専門職として各地で活躍しており、本課程を通じて育まれた人的ネットワークも年々広がっています。さらに、講師懇談会では各種データや授業アンケート等を活用しながら授業改善を進め、教育の質保証にも継続的に取り組みました。

研究活動では、刑事立法、刑罰理論、実証研究、矯正実務、團藤プロジェクトの五つの研究プロジェクトを中心に、国内外100名を超える研究員との連携のもと研究を推進しました。刑事立法プロジェクトでは、30年以上にわたる研究成果を集大成した『新時代の刑事拘禁法・処遇法（現代人文社）』を刊行し、実証研究プロジェクトでは、ISRD（国際自己申告非行調査）の分析を進めるとともに、NHKとの共同研究による闇バイト調査の成果を『矯正講座（第45号）』に掲載し、日本犯罪心理学会、日本発達心理学会などで報告しました。

2025年度は、6月に導入された拘禁刑制度を契機として、刑務所改革や再犯防止、更生支援に関する社会的関心が一段と高まりました。その中で、センター関係教員・研究員には数多くの取材や講演依頼が寄せられ、新聞、テレビ等を通じて研究成果や専門的知見を広く社会へ発信することができました。こうした活動は、本学及びセンターの研究力を社会に示す貴重な機会となりました。

社会貢献活動では、2025年12月13日に、龍谷大学深草キャンパスにおいて第15回矯正・保護ネットワーク講演会を開催し、223名の皆様にご参加いただきました。講演会では、「過去と他人は変えられないけど未来と自分は変えられる」をテーマに、自身も元受刑者で、現在は株式会社大伸ワークサポート代表取締役として、刑務所の出所者を雇い入れる日本財団の職親プロジェクトなどにも参画し、これまで200名以上の出所者を雇用している廣瀬伸恵様にご講演いただきました。元受刑者でもある従業員の方お二人とともに、これまで数多くの出所者らを自社に迎え入れてこられた廣瀬様の思いや日々のご奮闘の様子、今後の夢や目標、さらにはご自身の心得などについてお話しいただき、参加者からも好評を得ることができました。詳しくは、本通信内の講演録をご参照ください。

また、京都府内をはじめとする矯正・保護関係機関との連携をさらに深めるとともに、校友会組織である「ぎんなん会」「桐友会」とも交流を重ね、人的ネットワークの充実に努めました。さらに、地方自治体の再犯防止推進計画の策定や更生支援事業への協力など、センターに関係する教員や研究員が専門的知見を生かし、研究成果を社会へ還元する活動にも積極的に取り組みました。

2025年度は、日本の矯正行政にとって歴史的な節目の年でもありました。6月には拘禁刑制度が本格的に施行され、刑務所は懲役刑を執行する場から「改善更生」を重視する新たな時代へと歩み始めました。しかし、この制度改革を成功させるためには、新しい制度を整備するだけでは十分ではありません。受刑者一人ひとりと向き合う刑務官をはじめとする矯正・保護職員の専門性や使命感を高めること、そして社会全体が更生支援の意義を理解し支えていくことが何より重要であると考えています。

こうした節目の年に、矯正・保護課程は創設50周年を迎えました。この半世紀の間、本課程は数多くの刑務官、法務教官、保護観察官などを社会に送り出すとともに、矯正・保護分野に関する教育・研究の拠点として歩みを続けてきました。50年という歴史は、多くの卒業生や実務家、関係機関の皆様に支えられて築かれた貴重な財産です。

矯正・保護総合センターでは、この50年の伝統を礎に、教育・研究・社会貢献の三つの柱をさらに発展させ、現場の実践と学術研究を結び付けながら、エビデンスに基づく刑事政策の発展と次代の矯正・保護を担う人材育成に一層取り組んでまいります。そして、拘禁刑時代にふさわしい新たな矯正・保護のあり方を皆様とともに考え、次の50年へ向けた新たな歩みを進めていきたいと考えています。

今後とも、皆様のご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

センター主催　第15回矯正・保護ネットワーク講演会

2025年12月13日に開催された「第15回矯正・保護ネットワーク講演会」では、株式会社大伸ワークサポート代表取締役の廣瀬伸恵氏を講師にお迎えし、「過去と他人は変えられない けど 未来と自分は変えられる」と題してご講演いただきました。

講演では、これまで数多くの出所者を受け入れてこられた廣瀬氏の思いや日々の奮闘の様子、そして今後の夢や目標などについて語っていただきました。さらに、実際に更生し、現在同社で働いている社員2名の方からも直接お話を伺うことができました。当日は220名を超える参加者が集まり、会場は熱気に包まれ、講演会は盛況のうちに無事終了することができました。

「過去と他人は変えられない けど 未来と自分は変えられる」

講演者　廣瀬（ひろせ）　伸恵（のぶえ）　氏　（株式会社大伸ワークサポート 代表取締役）

開催日時／2025年12月13日（土）　13時30分～15時00分

開催場所／龍谷大学 深草学舎 和顔館 B201教室

開催趣旨

龍谷大学は、100年以上に及ぶ浄土真宗本願寺派の宗教教誨を基盤としながら、1977年に刑事政策に特化した教育プログラムとして、矯正課程（現在の矯正・保護課程）を設置しました。それ以来、刑務官や法務教官、保護観察官などの専門職のほか、保護司や篤志面接委員、BBSなどのボランティアの養成に努めて参りました。

また、2001年には、矯正・保護についての学術研究を推進する矯正・保護研究センターを設置しました。この研究センターは、2002年度からは、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（AFC）に採択され、8年間にわたり研究活動を行ってきました。

2010年には、矯正・保護総合センターを開設し、矯正や更生保護に関する教育実践としての矯正・保護課程と研究センターの研究活動との有機的な統合をはかることとしました。さらに、矯正・保護の分野における社会貢献活動も事業の柱として明確に加えることとしました。その社会貢献活動の一環として、2011年度から本講演会（「矯正・保護ネットワーク講演会」）を開催させていただいております。この講演会は、矯正・保護の実務家や関係する行政機関、民間団体、企業家、専門職の方々、地域の方々など、矯正・保護の問題に関心を寄せる多様な人びとに対し、それぞれの思索と相互理解を深めるための議論・研修の場として提供させていただいています。

今回は、株式会社大伸ワークサポート代表取締役の廣瀬伸恵氏を講師にお招きし、第15回矯正・保護ネットワーク講演会を開催することになりました。廣瀬氏は、栃木県のレディース暴走族『魔罹唖（マリア）』の初代総長で、自身も2度刑務所に服役し、獄中出産を機に更生しました。刑務所の出所者を雇い入れる日本財団の職親プロジェクトに参画するなど、「私は決して見捨てたり、見放したりしません！私自身もやり直すことができたのだから、人は誰かの支えで必ずやり直すことができるのです」を信条に、これまで自身が経営する会社に200人以上の出所者を雇用しています。廣瀬氏の波乱に満ちた人生や更生支援に関する取組などは多くのメディアにも注目されています。

この講演がお集まりいただいた皆様に実り多いものとなりますよう、心から願っております。

プログラム

●挨拶・趣旨説明・講演者紹介

浜井　浩一（龍谷大学矯正・保護総合センター長／同大学法学部教授）

●講演

講演者　廣瀬　伸恵 氏（株式会社大伸ワークサポート 代表取締役）

●質疑応答

後援

京都府、京都市、浄土真宗本願寺派、京都保護観察所、京都府保護司会連合会、京都府更生保護女性連盟、更生保護法人京都府更生保護協会、京都ＢＢＳ連盟

講演

「過去と他人は変えられない けど 未来と自分は変えられる」

講演者：廣瀬　伸恵 氏

はじめに　～元受刑者らと歩む覚悟、更生への伴走者として～

皆様、改めまして、こんにちは。先ほどご覧いただきました映像にもありましたが、私は更生保護女性会というボランティア活動をしております会員の一員でもあり、元協力雇用主をしておりました、栃木県栃木市にあります株式会社大伸ワークサポートの代表取締役、廣瀬伸恵と申します。弊社は、鳶土木工事や建造物の解体事業などを行っている会社で、設立してから14期目に入りました。

現在、従業員数は38名、そのうち前科前歴がある者は32名おります。また、暴力団組員だった者も6名おります。なかには、全身入れ墨で覆われている者、小指がない者もおりますが、そういった方の多くは死ぬ気でヤクザをやってきたからこそ、今度は死ぬ気で堅気として生きていこうと、必死できっぱりと渡世の道から覚悟をもって足を洗っていて、本当に感心するくらいに真面目に働く者もおります。

昨年も１人、地元栃木市内の元暴力団組員だった方に内定を入れてあるため、旭川刑務所に面会に行ってきました。暴力団を離脱する手続きを終えた彼は、懲役30年ととても長い刑期ではありますが、今度こそ堅気として人生をやり直したいと話す彼を、残刑22年間、私は身元引受人として、雇用主として、私が生きている限りは全面的にサポートし続けていきたいと考えております。



他にも、何度も刑務所を出たり入ったりしながら再犯を犯し続けている者も多くおりますが、根気よく話に付き合って、心に寄り添って、社会にいる生活に慣れさせるために、私なりに日々奮闘しているところです。

これまで私が雇用したなかで一番懲役に行っている方は、50代なのに12回も刑務所に入っていた者もおりました。そんな私の会社には、当然ながら続々と少年院や刑務所出所者が入社してくるわけで、毎月必ずと言っていいほど、さまざまなトラブルが起きています。

母親として社員に向き合い、生まれた“親子以上の絆”　～二人の声を聴いてほしい～

本日は、この場に2名の社員を連れてきました。2人とも入社して早々からトラブルばかり起こしていた問題児で、私はこの2人を、母親としての愛情を持って接することに徹しました。時には本気で怒り、一緒に泣いたり笑ったりと、本心からぶつかり合ってようやくニセモノではない信頼関係が生まれてきたのではないかと思えるような関係性を築き上げることができてきました。



1人は、17歳のときに我が社で働くようになってから、12年が経とうとしている原田です。そして、もう一人は、川越少年刑務所から引き取って、約4年が経とうとしている浦屋です。2人とも私と本気でぶつかり合ってきたことがありますが、今では本当の親子の関係以上の絆を深められてきたんじゃないかなと思える存在です。そこで簡単ながら、2人の話も聞いてやってください。

皆様、こんにちは。ご紹介にあずかりました原田です。今日は、私にとって特別な存在であり、そして多くの皆さんに影響を与えてこられた、私の育ての母であり、職場の経営者



でもある廣瀬伸恵さんが、どのような人か知っていただけたらなと思ってお話させていただきます。

彼女は、まさに知性と情熱を併せ持つ人です。決断の鋭さ、行動の素早さ、そして言葉に宿る信念。そのどれもが人を動かし、周囲を奮い立たせます。私の目から見て、彼女はただの経営者でも教育者でもなく、人を導くことで社会を動かす人です。

特に更生保護活動における彼女の姿勢は、過去に過ちを犯した人々、行き場を失った若者たち、彼女はその一人一人に正面から向き合います。甘やかしはしません。しかし、見放しもしない。叱るときは鋭く、見守るときは深く。

彼女の言葉は、厳しさの奥に不思議な温かさを持ちます。人の心に種をまいていくのです。その種がいつか小さな芽を出し、再び社会の中で生きる力となる。それが彼女の活動の本質です。彼女の信念は明快です。「人は誰でもやり直せる。過去と他人は変えられなくても、自分と未来は変えられる」。この言葉にどれほどの重みがあるのか。机の上の理念ではなく、現場で何度もぶつかり、傷つき、そして信じ抜いてきた人だからこそ言える言葉だと思います。私自身も母とは何度も衝突し、話し合い、共に成長してきました。

ある新たな支援方法の策定で、リスクを懸念して私が反対の立場をとったときに、彼女はじっと私の話を聞きつつも、自分の強い信念に基づいて行動を貫きました。議論を重ねるなかで深い洞察力に気付き、私の視野も広がりました。あの経験は、私にとって生涯忘れられない瞬間になりました。

彼女は、職場では頼れる社長として、家族としても母のような包容力を持っています。仕事においても家族においても、決して弱音を吐かず、常に前を見て動いていく。私自身も、何度もその背中に励まされました。



そして何より、彼女の生き方には覚悟があります。人を育てるとは、時に自分が傷つく覚悟を持つこと。信じるとは、裏切られるかもしれない不安を受け入れること。その覚悟を、彼女は自らの日常の中で体現しているのです。だからこそ、彼女の言葉には力があり、笑顔には重みがあります。私にとって、もう一人の母であり、そして人としての手本です。社会にとっては、道を間違えた人を正しい道へと導き、照らし続ける灯台のような存在だと思っています。

僕が彼女から学んだ大切なことを一つお伝えできたらなと思います。まず自分が知っていることがあるということ、そして知らないことがあるということ。この二つを知っておく必要があると思いました。本日ここに、彼女の生き方から学び、勇気をもらう人が1人でも増えることを願っています。ありがとうございました。



ただ今ご紹介にあずかりました、大伸ワークサポートの浦屋と申します。私は自分の生い立ちを話すと、そこまで大した人生を歩んでいないのですが、小学校6年間ちゃんと通いはしたんですけど、やっぱりいじめられっ子でして、牛乳が靴に詰められてあったりとか、廊下に自分の机が投げ出されてあったりとか、結構散々ないじめを受けていて、そのまま中学校に上がったんですけど、中学校に上がってから、そんな弱い自分がすごく嫌で、それから悪いことをするようになったんです。

中学校に上がって、やっぱり勉強もできなくて、成績がずっと悪くて、通知表は3年間ずっとオール1で、学歴がすごくコンプレックスでして、高校は成績が悪くても入れるような高校、一応調理師学校に入ったんですけど、そこでもやっぱりうまくいかなくて、卒業する前に中退、強制退学になっちゃいました。

強制退学になってからすぐに鑑別所に1回入っているんですけど、少年院に一度入りまして、（東京都）八王子にある多摩少年院に入ったんですけど、そこで1年間時間があるなかで、どうしたものかと考えたときに、じゃあ、今までできなかったんですけど、ちょっと勉強してみようと思いまして、勉強してみて、昔は大検といわれる、今は高卒認定試験と言うん



ですかね、それを全教科一度に受けてみたんですけど、これが面白いことに全部1回で受かってしまって、少年院は1年1カ月ですかね、2カ月ぐらい延びちゃったんですけど、それを出て。

少年院を退院してすぐに救急救命士の専門学校を一応受けたんですけど、それに落ちちゃって、そこからまたやっぱり駄目なんだと思っちゃいまして、ずっとまた悪いことをするようになりました。

二十歳を超えたぐらいですかね、最近はやりの特殊詐欺といわれる、他人からキャッシュカードを奪い取るようなかたちの詐欺なんですけど、それをやってしまって、3年6カ月ですね、ちょっと重たい刑になったんですけど、川越少年刑務所に入りました。そこでも2年半ほど過ごすことになり、時間ができたのでもう一度勉強しようと思いまして、2年間また勉強して、次はもっと高いところを目指してみようと思って、中央大学の法学部を目指したんですね。まあ、無理だろうと思いながら一応やってみて、通信ではあるんですけど試験もあって受けたら、見事合格はしまして、今、勉強している最中なんですが、現場の方にも出させていただいています。最近でいえば、鉄骨の建て方の作業主任者という資格を取らせていただきまして。これは一応現場に行くと、看板に名前が載るような資格でして、みんなのリーダーをできるような資格を取らせていただいたんですけど。

やっぱり大伸ワークサポートに入って、自分もガラッと人生が変わりまして、自分でもできるんだなと思えるようになることが結構増え、他の会社では当たり前かもしれませんが、仕事に毎日出ることも評価してくれて、これからのやりがいというか、達成感もたくさん感じながら、今やらせていただいています。

その中で少年院に入ったとき、刑務所に入ったときに勉強したなかで、哲学者のパスカルの言葉なんですけど、「人間は考える葦である」という言葉ですね。この会場のなかで誰か知っている人はいますかね、「人間は考える葦である」。最近、人気のサッカー漫画にも出てくるセリフなんですけど、この言葉がすごく好きですね。

人から受け取った言葉だったりとか、物事だったりとか、成功体験だったり、失敗体験だったり、全部含めてですけど、やっぱり成功するのも、何も考えないでやった成功よりも、何か自分で考えて試行錯誤しながらやった成功ってすごく意味のあることだなと思って。失敗もそうですけど、どういう経緯で成功に至ったのか、どうして失敗したのかという試行錯誤。

やっぱりこれも考えることなので、そういう癖がつくというか、この言葉が好きで、大伸（ワークサポート）に入ってから考える癖がつきまして、今は社長のお手伝いというか、仕事面以外でも、プライベートでもお手伝いできることがあれば、力になることが最近少しずつ増えてきまして、すごくやりがいを感じながら毎日を過ごさせていただいています。

そんなに大した人生は歩んでいないかもしれませんが、大伸（ワークサポート）に入って、自分には無理だろうなとか、自分じゃちょっとこれはできないなと思うことが、最近できるように少しずつなってきたので、大伸ワークサポートに入ってよかったなと、社長についていってよかったなと、さっき流れたテレビ番組のなかに自分も少し出ていたんですけど、思うようになりました。

なので、これからも社長のもとで、自分も（社長を）第二の母だと思って頑張っているので、会社と、社長と、社会の方々にも、もし機会があれば貢献できるように頑張っていきたいなと思っています。以上です。ありがとうございます。



過去を価値に変えて　～協力雇用主としての思い～

これまで全国の各少年院や刑務所に、私自身が運転をして、人となりを知るために、何十人もの面接に回ってきました。応募者を全員採用するわけにはいきませんが、絶対にやり直すという覚悟のある人は、できるだけ採用するようにしています。

さて、この協力雇用主になって12年目になる私ではございますが、なぜ協力雇用主になろうと思ったかについてもお話したいと思います。



実は私も13歳のときに、両親の激しい夫婦喧嘩の末、両親が離婚し、家族がバラバラになったことから、まだまだ子どもだった私は、孤独とか寂しさから非行に走り、女だけで形成された暴走族に入りました。

毎日喧嘩に明け暮れ、暴走行為や窃盗、傷害事件など、悪いことを散々してきた過去があり、私自身がやり直し、そして生き直しの経験者なんです。私が初めて感じた自分の居場所が暴走族であり、そのケツモチをしていた反社（反社会的勢力）の人たちとの関わりもあって、20代のほとんどを女子刑務所で過ごしてきました。

そんなどん底まで堕ちた私の人生に転機がやってきました。それは、女性にしか経験のできない妊娠、そして出産です。そこで、生まれて初めて、過去に自分がしてきたことを心から後悔しました。女手一つで育てていかなければならない不安と闘いながら、この子のために本気で変わりたい、いや、変わらなければいけないと真（しん）から思いました。そこから社会に対して、生まれて初めて贖罪の気持ちが生まれたのです。

あれから会社を設立して14年の間、いろいろな人と関わる中で、昔の私と同じように、生まれ育つ過程で大きな壁にぶち当たったとき、孤独や寂しさや知識のなさから、その壁を乗り越えられずに、苦しんでいる人たちとたくさん出会いました。

不遇な家庭環境にある人や、家族から見放されている人の心はガチガチに凍っていて、まるで昔の自分を見ているようでした。そんな彼らの気持ちが痛いほど分かる私だからこそ、彼らの気持ちに寄り添って、彼らのよき理解者でいたい、そう思うようになりました。

私自身、刑務所から出てきて、社会復帰がどれほど大変なのかを身をもって知っています。一度でも罪を犯すと、社会の目がどれほど冷たいものかも、身をもって感じてきました。元犯罪者は社会から排除すればいいという風潮は今も変わりありません。

私が最後の懲役をつとめたのは、もう17年前の話になりますが、いまだに私の過去を持ち出されることも少なくありません。どんなに後悔しても、時間は巻き戻せません。どうしたって過去を変えることはできないけれど、未来は変えられる。そう信じて、今は自分の過去があるからこそ、同じような立場に立って出所者たちと向き合うことができるんだと思っているし、過去を価値に変えられるようにと頑張れているのだと思っています。



更生のカギは　～居場所づくりのための会社、愛情と手料理で育む絆～



話は変わりますが、ある日、両親から虐待を受けていた、犯罪を繰り返す１人の少年と出会い、その少年と関わっていくにつれて、私がこの少年の心の闇を取り除いてあげたい、親の愛情を受けてこなかった、この心を閉ざす少年に、家庭の温かさや本来当たり前のように受けてこられるはずの親の愛情を知ってもらいたいと思うようになり、その少年に「私がおまえの母ちゃんになってやる、うちで一緒に暮らそう」と言って、一緒に暮らすようになりました。

その子が、今日連れてきている原田。この子のことです。この少年は、今ではあれから14年も経って家庭をもち、31歳になって2児のパパとなり、離婚という苦悩も経験しながら試練を乗り越えて、現在は弊社にとって大きな戦力となる人材となってくれています。

こうして少年院や刑務所から出てきても行き場のない人を受け入れていくうちに、1人増え、2人増えていって、みんなのお母ちゃんとなり、現在は38名の大所帯となりました。私

が当初から心掛けていることは、自分の子どもも含め一人一人平等に接し、誰とでも同じ目線で向き合うということです。

毎日、夕食は私が作った母の手料理を味わってほしくて、相撲部屋のおかみさんになったつもりで大量の食材を買い込み、栄養満点のメニューを考え、毎晩みんなで食卓を囲むことを日常の中では一番大事にしています。これが先週とか先々週くらいに撮ったわが家の写真です。

食事を共にするということはとても深い意味があり、これこそが更生のカギだと私は実感しています。風邪をひいたり体調を崩した社員には、母ちゃん特製粥を作ってあげたり、薬を飲ませたりと看病をしてやることも大切なことだと考えています。

愛情を存分に受けられなかった子どもたちは、ちょっとした問題行動を起こしがちです。子どもが人として間違った行動を取ったり人として道を踏み外したりしたら、本気で真剣に怒る。子どもには栄養を考えた愛情たっぷりのご飯を作り毎日食べさせる。ケガをしないように見守り、病気のときにはちゃんと看病をする。子どもが困っているときには必ず助ける。こんなスタイルのもと子育てをしている私ですが、同じことを社員一人一人にもやってあげればいいだけのことだ



と思いながら実践しています。

年齢を問わず、全社員が自分の家族だと思って接するようになってからというもの、みんなの笑顔が増えてきて、ここが私、そして俺の居場所だと言ってくれるようになりました。社員みんなが元気でいてくれたら私も元気になれるし、社員みんなが笑顔でいてくれたら私も笑顔でいられるんです。だから、私は38名の従業員という名の息子や娘たちに囲まれてとても幸せで、出所者を雇うことをメインとした居場所づくりのための会社を作って本当によかったと思っています。

寄り添いと安全の両立　～協力雇用主としての思い～



私が会社の長として採用時・就業時に気を付けていることについてもお話ししたいと思います。まず、採用時に気を付けていることは、本来出所者を受け入れする際に私が身元引受人になるのですが、一定期間は家族のように迎え入れ、通常同じ敷地内で私たちと共に生活をしてもらっています。相手の立場になって物事を考えて、寄り添う気持ちを忘れずに生活をするということです。

時には意見の相違や生意気だといって逆恨みされたりして、朝起きると自宅1階のリビングの窓ガラスがバリバリに割られていたり車にいたずらをされたり、危険な目にも遭ってきたので、敷地内や自宅のメインの部屋には防犯カメラを計10台以上設置したり、警備会社のALSOKと契約をし、安全確保に努めたりもしています。どんなに対策をしても不本意ながら被害に遭うこともありました。こちらの映像をご覧くださ

い。

このとき私は自宅の中に社員5､6人と一緒にいて、ちょっとびっくりして体が固まってしまっていたんですけれど、その後すぐに110番通報をしたんですが、いまだ犯人は捕まっていません。これが防犯カメラの映像と写真でした。

面接時にはとても感じのいい人だったとしても、実際に雇い入れてみると全く別人のように豹変してしまう人も少なくありません。少年院、刑務所、またテレビ会議室を使わせていただく面接だけでは、出所者の労働者としての能力や適性を判断することは極めて難しいものです。

実際に働いてみて仕事の流れや社風に慣れてきたかを見極めるため、弊社では他の企業よりも試用期間を長めにとったりしています。異なる年齢層の人を雇っているので、それぞれの才能を生かし役割を分担させることを重視しています。





それこそが経営者としてのつとめでもあり、そうすることで最大の価値が生まれると思っているからです。

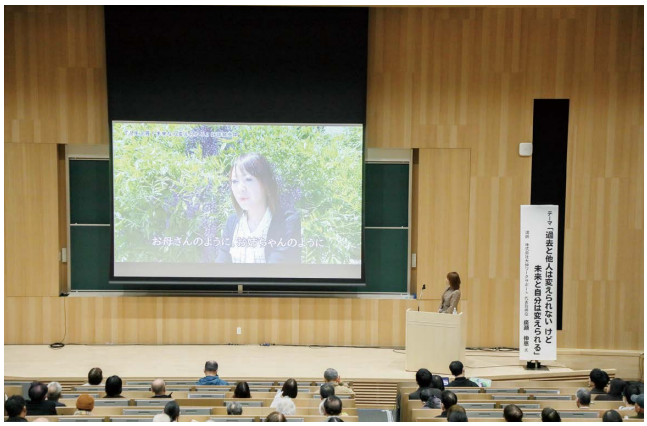
就業時に気を付けていることは、どこの現場も円滑にまわすには、短時間で効率よく業務を遂行しなければならないというミッションが課せられています。安全と安心が何よりも優先される現場仕事においては、社員間のコミュニケーションと情報共有が非常に重要となります。

そこで弊社では、よくバーベキューや社員旅行、忘年会や新年会、誕生会などを開催し、社員全員とその家族、子どもたちを含め60人以上が集まり、絆や親睦を深めるために食事を囲んでとてもにぎわっています。こういったイベントは、従業員同士の距離を縮めることもできて、良好なコミュニケーションを生み出してくれるということから、一つのことを一緒にするという共通体験を通して、仕事のチームワークを強固にしてくれていると感じています。

過去に過ちを犯してしまった社員が、過去を打ち明けられる仲間がいることによって孤立することが少なくなり、社員一同が一体となり、チームプレーが仕事を円滑に進めるための基本となっているように思います。そこで、いろいろな問題が起こるなかで対策を取ってもトラブルが起きることも度々あり、私は協力雇用主として失格なのではないかと自信をなくし、不安に押しつぶされそうになったときが度々ありました。

それでも再犯することなく更生し頑張っている社員たち、そして仲間や少なからず応援してくださる人たちの支えや協力があってこそ、続けてこられたのではないかと思っています。

協力雇用主の登録抹消　～更生支援の道を閉ざさないために～



しかし、どんなに頑張っていても理解してくれない方も大勢います。

私自身、まさに今年1月19日、警察からの捜索がなされ、皆で食卓を囲む憩いの場である我が家から1.26グラムの大麻が見つかり、「事情を聞くためだ」と言われての私の逮捕に続き、社員から複数名の逮捕者を出してしまいました。

もちろん私は嫌疑なしの不起訴処分で釈放されたものの、このことでこのたび令和7年6月4日付で宇都宮保護観察所より指導が行き届いていないなどの理由で強制的に協力雇用主の登録を抹消されるという重い処分を受けることになりました。協力雇用主とは、そもそも犯罪歴のある人の自立と社会復帰を支援するため、彼らを雇用しようとする民間の事業主のことです。

2023年10月1日時点で全国の協力雇用主の登録数は2万4,969社です。そのうち実際に犯罪をした人などを雇用している事業主は912社にとどまり、1,000社を今年切って全体の約3.6%に相当します。入札優遇制度の利用などにこだわらず、真（しん）からの気持ちで1社でも多く、犯罪歴がある人のために、就職が難しい人々の事情を理解し、雇用することは大事なことなのではないかと思っています。

そこで、弊社の顧問弁護士より宇都宮保護観察所所長様宛に上申書を書いていただきました。しかし、保護観察所からの回答は、私の活動を全て否定される冷たいものとなりました。また、協力雇用主登録抹消以外にも、身元引受人も全て不可、また仮退院中や仮釈放中、保護観察処分の方、一部執行猶予の方など、保護観察所が関わる全ての人たちの雇用を禁ずるということになりました。

弊社から身元引受人として、各少年院や刑務所から12名の内定者は全て取り消されるという事態に発展し、やり直しに向けて張り切っていた受刑者から絶望を意味する手紙が殺到しています。それでも弊社にどうしても就職を希望する者は、皆、満期が来てから我が社で働いてくれています。



最近では網走刑務所から我が社で働くために、仮釈放を蹴ってまで満期を希望した31歳の青年が、弊社の一員となって間もなく3カ月が経とうとしています。公私ともに非常に落ち着いた生活を送っており、順調にいっております。今月も久里浜少年院から仮退院した者が、どうしても我が社で働きたいと言って、お母さんも同席してもらい先々週面接をしてきました。先週から彼は我が社で働いてくれています。保護観察所がいくらダメだと言っても、私は彼らの意思を汲んで見捨てるわけにもいかず、モヤモヤを抱えたままヤキモキした日々が続いております。

しかし、この宇都宮保護観察所からの「就労支援に一切携わるな」という言葉もきっと私にとっての試練であり、意味のあることなんだと前向きに受け止め、一歩一歩前進あるのみだと頑張っていきたいと思っています。

思い返せば私の人生とは、常に何事も諦めなかったことだけは唯一自慢できるところでもあります。そのときそのときの自分の夢や目標に向かって、私は常に走り続けてきました。若き頃から私は目標や夢に向かっての努力を惜しんだことはありません。それが私、廣瀬伸恵なんです。

夢を諦めない力　～真剣に生きることに意味～



さかのぼると16歳の頃は地元で有名な暴走族のレディースに入り、その後、新たなチームを自ら立ち上げ、初代総長として17代目まで続く北関東一の伝説のレディースを作り上げました。次に3店舗の店を構え、スナックのママになるという夢も達成できました。子どもを作るという夢も実現できました。マイホームを建てる夢も達成しました。会社の社長になるという夢も達成したけれど、唯一『クレヨンしんちゃん』や『サザエさん』のような平凡な家庭を作るということだけは失敗してしまいました。

でも、アットホームな会社を作り、家族同然の社員と毎日食卓を囲み、休日には社員たちとみんなで銭湯に行ったりもして、にぎやかな笑顔の絶えない社員や仲間をつくるという願いもかなえました。そうなんです。

私は何があっても夢や目標に向かって、何事も諦めなかったということが一番言いたいです。

夢を追いかけていたら誰だって必ず壁にぶち当たるときがあります。思っていてもうまくいかなくて悔しい思いをしたり、怒り狂ったり、悲しくて涙が止まらなくなったり、どうしていいのか分からなくなってしまったりすることもあります。でも、よく考えると、それは当たり前なんです。だって、追いかけているのは夢なんだから。簡単に手に入らないのが夢というものなんです。目標に掲げたり、困難に打ち勝ってつかむのが夢なんです。やりたいと思わないなら、やらない方がいい。

でも、自分でやりたいと思ったことなら諦めずにやり続けていくことこそが、最大の力を生み出してくれるものだと私は信じています。だから、いつの日か必ずまた協力雇用主として復活させてみせようと、今までやり続けてきた出所者たちの気持ちに寄り添って、出所者たちの居場所づくりのために、これからも邁進していくつもりで活動を続けていきます。

この龍谷大学に夢や希望を持って入学した皆さま方は、あなたの夢や希望に近づいたラッキーな方たちだと思っています。今後の人生を後悔することなく過ごせるかは、あなた方のやる気次第で大きくも小さくも変化してくるものだと思います。私の会社の社員たちも、各々が会社を思う気持ちが強かったから、ここまでの大所帯になれたんだと思っています。一日一日を真剣に取り組んでみてください。私はどんな仕事でも常に真剣に取り組んできました。

自慢にはなりませんが、若い頃には悪行も一生懸命こなし。水商売でもそう、店を構えるまでにし。建設業もそう。これから始まる新ビジネスのアパ社長を見習って出来上がる来年4月12日オープン予定のビジネスホテルＡＫＥという旅館業もそう。全てにおいて真剣に取り組んできた結果だと思っています。

このビジネスホテルは、女性出所者がベッドメイキングや調理、フロント業務などで活躍できる場を設けたいという思いから、総工費1億円をかけて作りました。誰かのために自らの立場や命でさえ差し出す覚悟、それを持つ者こそが本物のリーダーとしての条件であると思います。





お酒を飲んで楽しませるためにセクシーダンスを踊ったり、下品な話や下ネタを話していたら、これは普通だったら、ただのバカ女です。でも、なりふり構わず真剣に踊ったりするのも、笑いに変えようと自虐ネタを言ったりしていると、相手に真剣さが伝わり、誰かが笑顔で見守ってくれているという気持ちになれます。

真剣にやるということは、若い世代や周りの目を気にする方々にとっては恥ずかしいことなのかもしれません。でも、100人中99人がたとえ応援してくれなかったとしても、たった1人でも応援してくれる人がいたら、それだけで幸せだなって私は思います。真剣に取り組んで、もしつらいこと、悲しいことがあったら、今日この講演をしている私の言葉を思い出していただけたらって思います。

最後に　～私なりの心得11箇条と今後の夢～

最後に、生きていく上で一番厄介な、でも、必ず関わらなければならない人間関係について、私なりの心得をお話しします。

① 自分のことを嫌いな人にまで好かれる必要はない
② 気が合わないなぁ～って思ったら気が合うところまで距離をとる
③ 悪意に誠意で返さなくて良い
④ 人間関係の一番の敵は『無理をする』こと
⑤ 友達とは あなたの欠点まで愛してくれる人のこと
⑥ 良い時も悪い時も 同じ態度で接してくれた人を信じるべき
⑦ 大切なのはどん底の時誰がそばにいてくれて誰が支えてくれたのかを忘れないこと
⑧ 去る人は去るし 縁がある人とは またつながるものだと思う
⑨ 過去と他人は変えられないけど未来と自分は変えられる
⑩ 当たり前のことをコツコツと頑張り続けることが夢を現実にするコツ
⑪ 信じるものは言葉ではなく行動

という私なりの11箇条をしっかり覚えていただけるとうれしいです。

今の私だからこそできること、そして私にしかできないこと。これが私に与えられた新しい生き方なんだと思っていて、私なりに精一杯人の役に立てるような頼もしいかっこいい女で居続けたいです。

そして、私の今後の目標としては、就業意欲や能力の乏しい人に向けた障がい者施設を立ち上げたいということです。健常者ですら少年院や刑務所から釈放後に行く場所が足りなくて再犯が増えているというのに、障がいを持った人はもっともっと苦労をしているはずだから、そういった人たちの居場所を作ってあげたいという思いから、今の目標になりました。入所者には、どうしたらステップアップできるかを一緒に考えて、本人の強み、力、良いところを見つけ出し、アットホームでよりよい環境づくりを心がけた施設にしたいという夢を思い描いています。



今回、こんな私の講演を聴いてくださった皆さまに、一人でも協力雇用主や就労支援の現状を知っていただき、共助の意識を持っていただいて、対象者に居場所を与え、彼らの更生を助け、生き直しにおける支援者の一員となってくださることを心から願っております。また、私を題材とした『人生上等!未来なら変えられる』が株式会社集英社インターナショナルより出版されております。ご興味のある方はどうぞお買い求めくださいませ。

質疑応答

○司会者　廣瀬様、原田様、浦屋様、貴重なご講演ありがとうございました。

　引き続きましては、質疑応答の時間に移らせていただきたいと思います。それではご質問のある方は挙手をお願いします。早いですね。最初に目が合いましたので、どうぞ。

○質問者A　遠方からわざわざありがとうございました。4年間ほど姫路少年刑務所に私はいたことがあるんですけども、協力雇用主さんとして面接をされて、採用に至らないケースの場合、どういったことで判断されたのか、教えていただけたらと思います。

○廣瀬氏　はい。月に1回、役員会議などをおこなっているんですが、そのときに面接希望の方の履歴書をみんなで見ます。性犯罪の方はほとんど採用を見送る場合が多いと思います。あとは、結構、私は比較的採用したいって考えるんですが、結構周りの社員が「絶対にやめろ」という意見が多かったりするので、今のところ10人中1人、2人採用しているのかなと思いますが、何か意見はありますでしょうか。

○浦屋氏　犯罪歴に問わず、履歴書を見させていただいたりするんですけど、明らかに何か自分たちの目から見てもそうだし、世間一般の目からしても何かやばそうだなと思ったら、社長ちょっとやめた方がいいんじゃないかと声をかけるようにしています。

○原田氏　そうですね。犯罪、過去の経歴とかを履歴書で見て、最悪の状況を想定したときにどういったことが起きるのかというのを考え、その上で相談をして決めていくんですが、社員を傷つけたり、元請けさんにすごい迷惑をかけそうな可能性がある場合は、自分は反対意見を出して社長と相談をしながらという形にはなるんですけど、そういうときはやはり採用に至らないケースもあります。

○司会者　よろしいでしょうか、はい。それでは、次の方よろしくお願いします。

○質問者B　龍谷大学の学生です。本日はお話ありがとうございました。「講演者プロフィール」でも廣瀬さんがお書きになられていたＮＨＫ『ねほりんぱほりん』を見させていただきました。

○廣瀬氏　ありがとうございます。

○質問者B　とても面白かったです。質問なんですけれども、動画などの中で「社長に助けられた」というような発言などがありました。そのところが気になったのですけれども、逆に廣瀬さんの方が従業員の皆さんに助けられたようなことがあれば教えていただきたいです。

○廣瀬氏　常に助けられているんですけれども、やっぱり男性社員が多いので殴られたことも結構私はあるんですね。そういうときに周りのせがれたちが、（私が）せがれのように思っている男性社員がいると「うちの母ちゃんになんてことをするんだ」というふうに怒ってくれる頼もしい存在で、



助けられているなって思います。私が男気性といえどやはり性別は女性なので、危ない目に、さっきの映像にもありましたが、あれは元社員だと思っているんですね。あの覆面の4人組に襲われたときも、私と娘とあと4、5人の社員が家の中にいたんですけど、そういうときもやはり社員のみんなが私を一番に、なんでしょう、安全な場所に移してくれたりとかしてくれるんですね。

　あとは面接のとき必ず2人（原田氏、浦屋氏）も連れて行っていたときがあったんですけれど、やっぱり私は結構「甘い」と言われていて、2人は厳しい目で見てくれて、ああ、そうかもしれないなって納得させられる部分があって、本当に日々私の方が感謝をしています。助けられていると思っています。

○質問者B　ありがとうございます。

○司会者　はい、他にいませんか。じゃあ、後ろの方どうぞ。

○質問者C　私は保護司をしています。大変素晴らしいお話をお伺いいたしまして、本当にありがとうございました。なかなか協力雇用主にもなれないんですけども、最初にどうして会社を立ち上げられたのか。また、建設会社のいろいろ機械を買ったり、技術を習得したりするというところがあると思うんですけども、最初のその立ち上がりのへんをどういうふうにされたのかということとですね。そしてもう一つは、先ほどビジネスホテルを作るということを申されていましたが、これも普通の人がそう簡単に思いついて作るというふうにはならないと思うんですね。そのきっかけといいますか、そのへんをお教えいただければと思います。よろしくお願いします。

○廣瀬氏　私が最後、31歳で刑務所から出所して、介護の資格、ホームヘルパー2級とか、いろんな資格を取ったり、社員食堂とか給食センターとかいろんな仕事に就いてみたものの、地元に私はやっぱり帰ってしまったこともあって、噂で「あの人、刑務所あがりの人だよ」というふうにバレてしまって、そういう人は雇えないよということで突然クビになったりとか、やっぱりいづらくなったりしてどうしても職を転々とすることになってしまったんですが。

　そのときに、建設業のアルバイトに行ったときに、過去



を隠さなくても大丈夫な雰囲気というか、社長自身や働いている人も元ヤクザだったり、あとは刑務所あがりの人を社員に抱えているのが、建設業がすごく多くて。

それで私も「やってみるか」という声をかけていただいて、経営のノウハウを多少教わりながら、この就労支援をやろうとかじゃなくて、自分が食うために一番居心地がよかったのが建設業だったので、それで自分で思い切って始めてみたという流れなんですが。最初は社員2人とか3人の小さな小さな会社で下請け、3次下請け、4次下請け、5次下請けぐらいかな、本当に下の方で一部解体とかを請け負ったりして始まっていったんですけれど。

そこから原田なんかは、もう13年、14年ぐらいうちの会社にいたり、もっと長い子も何名か今もいるんですけれど、そういう子たちに協力をしてもらったり、逆に私が仕事のことを教わったりしながら大きい現場を受けられるようになって、売り上げも徐々に伸びていって、それで人がどんどん増えていって、今では40名前後の大所帯になっていったという流れなんですが。

ビジネスホテルを始めるにあたっては、うちは身元引受人というものをやっているので、少年院や刑務所から出てきた人を、私の家の敷地内に簡易なプレハブを建て、そこに住まわせていたんですけど、売り上げがある程度伸びていくうちに、一軒家を買い取って、そこの中をリフォームして、社員寮として今9物件ぐらい持っているんですけれど。あと、アパート一棟を買い取ったりするようになりました。

最初は、あのビジネスホテルは中古で、もともと前日光というビジネスホテルだったんですけど、そこは社員寮のために買い取ったんですが、ゴルフ場も近くにたくさんあり、今海外の観光客（インバウンド客）とかも多くなってきていているので、思い切りました。

あと、女性作業員が今も何名もいて、女子刑務所から出てきた子も雇っているんですけれど、やっぱり体力的に厳しかったり長続きする子が少ないということもあって、女性出所者の受け入れをどうにかならないかなと。だからといって、みんな事務員ができるわけじゃないので。

それで女性の受け入れを、私の自宅でご飯づくりを手伝わせたりとかしていたんですけど、それだけじゃやっぱりおっつかないので、何か女性の出所者をメインとした職場づくりができないかなと思っていたときに、買い取っていた前日光というビジネスホテルがあったので、そこをビジネスホテルとして女性を受け入れられるような職場にしようと思い切って始めてみました。私は素人なのでどうなるかは不安なんですが、アパ社長を見習って来年4月にオープンする予定です。

障がい者施設に関してもホームヘルパー2級を取ったくらいで全然経験が少ないので、私は行き当たりばったりで何も考えずにチャレンジャーなところがありまして、取りあえずそういう出所者たちの居場所づくりという意味で、少しずつみんなに、安月給で申し訳ないんですけれど、そこを切り詰めながらお金を貯めて、新しい出所者を受け入れる場として、やっているところです。こんな感じでよろしいでしょうか。

○司会者　はい、他にどなたか。はい、じゃあ、一番後ろの方どうぞ。

○質問者D　すみません、作業服を着ていますが、播磨学園の教官をしております。私みたいな者が言うべきことじゃないんですけど、いつも在所者、あるいは出所者等に対してご協力をいただきまして、本当にありがとうございます。引受先がないと特に少年院の子たちは帰れないので本当に感謝をしております。また個人名は言えないですけど、うちの子が廣瀬社長のところでお世話になった経験がありまして、今一生懸命頑張っております。

自分は施設で働いている支援者の一人なので、この人をどうしようかと思って、あるいは施設の運営とかで教官が困っている状態を何とかしないといけないと思って心が折れそうななか、今日は社長のお話が聞けて、施設のなかで支援をするだけの仕事を自分はしているんですけど、もう一回いろいろ考えてみようと思うことができました。

その上で、あまり考えてこられたことがないかもしれませんが、お二人を含め、感覚的な所感で結構ですので、質問にお答えいただければと思います。今支援をしないといけない困っている人たちの多くは、社長が「高齢者も、障がい者も」とおっしゃられたみたいに、引き受けがないこともそうだし、親御さんが誰かに助けを求めるということを拒むとか、そういう習慣がない人たちが多くて。出所をしていく、仮退院をしていく子たちも、親を見習ってそういった手を広げていったり、知識を広げていったりということが非常に少なくて。



私自身は、こういう方向がある、こういうことを行政がしてくれる。でも、それは途中までだから今度は違う人につながりなさいというふうに指導はしているんですけど、なかなかそうはならない中で、親御さんとか家族を含めて支援をしていかないといけないなと思って奮闘しているんですが、家族を含めて、その退所者だけじゃなくて、家族とか周りを含めて支援をしていくということについてどのようなことが必要だと思われるか、直感で構いませんのでお答えいただければと思います。

○原田氏　はい、ありがとうございます。僕が思っている家族や周囲の人たちに対する支援なんですけど、まずこういった講演とかYouTubeとかでも動画があると思うので、そういったところでお話を聞くのもよいと思います。やはり世間体とかで、うちの家族の中に犯罪を犯した者がいる、でも、それを周りに言いたくない。その気持ちは分かるんですけど、じゃあ、その相談を周囲の人に言わなくても、こういう解決法があるんじゃないか、そういうことを知ってもらうというのが、一つすごく大切なことだと思うんですけど。

あとですね、先ほど登壇したときにお話ししたところにつながるんですが、自分が知っていることがあるということと、知らないことがあるということ、その自分が知らないことがあるということを知ってもらう、その方法をどうアップデートしていくべきなのかというのを、考えていったらいいんじゃないかなと思います。

それで、やっぱりバイアスがかかっているかもしれないという。特に元受刑者の人とかというのは、悪いイメージが先行してしまって、イメージで「ああ、この人はもしかしたらこういう人なんじゃないかな」というイメージが先行してしまうことがあるんですが、常にバイアスがかかっているんじゃないかということを考えながら、支援をしていくことが必要なんじゃないかなと思います。

○廣瀬氏　うちの話になってしまうんですが、うちの会社には週に1回、多いときは月に5、6件親御さんからご相談を受けていて、まず事務員の方が対応をして私にLINEでその概要を伝えてくるんですけれど、私の手が空いたときに、お母さんからのご相談を受けていることもあり、長い方は1年ぐらいずっと相談に乗り続けている人もいます。

あとは、うちで採用をした社員の親御さんで、お母さんが多いんですが、一緒に社員旅行に連れて行ったりもしますし、忘年会とかも一緒に来てくださいと言っています。だからこそ、社員が40、50人いても、社員旅行は、実際は70、80人に膨れ上がってしまうことが多くて、そういうときにしっかり相談とか悩みとか不安材料を聞いて、取り除いてあげたいなという気持ちで関わらせていただいています。

○浦屋氏　私は、メディア、情報がすごく大きい（影響がある）と思っています。先ほど話がありました受刑者求人雑誌『Chance!!』だと、やはりバイアスなどがかかってしまうので、最初に映像で見ていただいた日本テレビの『news every.』なんかは大手のメディアなので、子どもたちから



お年寄りの人までたくさんの人たちに見てもらうのはすごく大きいと思うのと。あとはやはり採用面接に限らず、社会科見学みたいなものを、いろんな協力雇用主さんのところでやってもらうのがすごくいいんじゃないかなと私も思います。

○司会者　時間が押してきておりますけれども、あとお一人。どなたか。じゃあ、そちらの方、お願いします。

○質問者E　矯正・保護課程を受講させていただいております。本日は大変参考になるお話をどうもありがとうございました。

資料の中で、200人強をこれまで採用されてきたということでした。現在50人ほど雇用されているということですが、残り150人ほどの方は、何らかのかたちで御社を卒業されていると思うのですが、その方々がどのような形で卒業されたのか。教えていただけたらと思います。

○廣瀬氏　まず、うちの会社を辞めて飛ぶ子が多いんですけど、うちの会社を辞めた子の半数以上は、再犯で捕まっている子がほとんどだと思います。あとは暴力団に戻った子も少なくないですし。ううん、そうですね。うちの会社を辞めて頑張っている子が正直少ないのが残念なところですが。

○司会者　よろしいでしょうか。

○浦屋氏　中には、会社を辞めて、自分の力で会社を持ちたい、独立したいということで、一人親方という形で頑張っている人もいますし、うちの会社で得たスキルを使って、建設業の中でも別の業種とかで頑張っている子たちも少なくはないので、辞めていなくなってしまった人、再犯してまた刑務所に入ってしまった人、そして他の会社、同じ業界で、自分の力で頑張っている人など、その150人の中にはいろんな人がいますね。

○司会者　皆様、よろしいでしょうか。その他にも手を挙げられた方が何人かおられましたが、お時間が来てしまいました。本当に申し訳ございません。質疑応答の時間を終了させていただきます。改めて、廣瀬様、原田様、浦屋様、本日はどうもありがとうございました。

以上をもちまして、第15回矯正・保護ネットワーク講演会を閉会させていただきます。本日はありがとうございました。

○廣瀬氏　ありがとうございました。（会場拍手）

新着情報

第16回 矯正・保護ネットワーク講演会開催案内

主催：龍谷大学矯正・保護総合センター

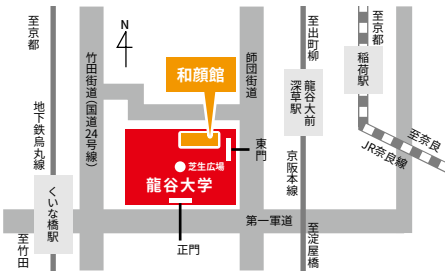
参加費無料
要事前申込
先着300名様

テーマ

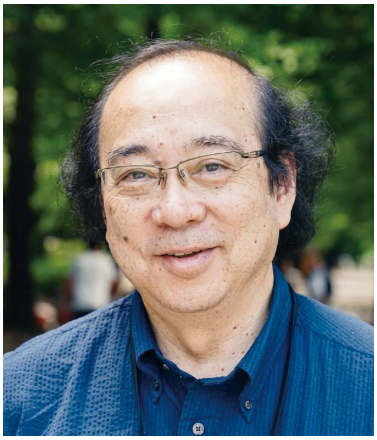
受刑者の経験に学ぶ
－刑務所で当事者研究をやってみた経験から

2026年12月12日（土）
13：30～15：00（開場 12：30～）

龍谷大学 深草学舎 和顔館 B201教室
（京都市伏見区深草塚本町67）
JR奈良線「稲荷」駅下車徒歩約8分
京阪本線「龍谷大前深草」駅下車徒歩約3分
京都市営地下鉄烏丸線「くいな橋」駅下車徒歩約7分
構内に駐車場はございません。
公共交通機関をご利用ください。



■講演者



むかいや ち いくよし
向谷地 生良 氏
（社会福祉法人浦河べてるの家理事長/北海道医療大学名誉教授）

＞プロフィール

青森県十和田市出身。大学でソーシャルワークを学び、1978年より北海道浦河町にある総合病院の精神科ソーシャルワーカーとして勤務。1984年に「浦河べてるの家」を設立し、精神障害当事者の地域生活や日高昆布の販売等の事業展開を支援した。2001年に「当事者研究」を創案・普及させ、同時に精神科の病床削減と地域移行（2014年病棟休棟）に取り組む。国内外の研究機関、関係者と当事者研究の学際的な交流を推進。2003年より北海道医療大学で教鞭を取り2021年４月名誉教授、特任教授。2021年10月より社会福祉法人浦河べてるの家理事長、2026年4月より同大学客員教授。一般社団法人伴走型支援協会代表理事（2020）。

参加お申込み

参加をご希望される方は、事前にお申込みが必要です。

インターネットから

①矯正・保護総合センターホームページ（https://rcrc.ryukoku.ac.jp/）
の「講演会等のお申込み・資料請求」ボタンをクリックしてください。
②「お申し込みフォーム」の必要事項（名前・住所・メールアドレスなど）を入力し、
内容確認後、送信ボタンをクリックしてください。
登録されたメールアドレスに受付完了メールを返信いたします。

FAXから

以下の参加申込書に必要事項をご記入の上、送信してください。

お問い合わせ

龍谷大学　矯正・保護総合センター
TEL：075-645-2040　FAX：075-645-2632
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
https://rcrc.ryukoku.ac.jp/
E-mail: kyosei-hogo@ad.ryukoku.ac.jp

2026年12月12日　第16回矯正・保護ネットワーク講演会参加申込書

フリガナ		当てはまるものに○をしてください。	
お名前		年齢	10代　20代　30代　40代　50代　60代　70代以上
ご住所	〒		
電話番号		FAX番号	
メールアドレス		ご所属・ご職業（差し支えなければ）	

FAX 075-645-2632

研究活動紹介

実証研究プロジェクトの活動について

実証研究プロジェクトでは、2020年度から国際自己申告非行調査（ISRD：International Self-Report Delinquency Study）に参加し、日本の中高生を対象とした調査研究を実施しています。

ISRDは、世界各国の中高生に対するアンケート調査を通じて、自身の非行・犯罪の加害および被害経験に加え、その背景にある家庭、学校、友人、地域などの生活環境や本人の意識・価値観を把握し、国際比較を行う大規模な調査です。警察などが把握した犯罪統計だけでは捉えることのできない、青少年自身の経験や、その背景にある生活環境との関連を明らかにできる点に大きな特徴があります。また、各国のデータを比較することで、少年非行の実態や背景、日本と諸外国の青少年の行動・意識の共通点と相違点を明らかにすることができます。こうした知見は、青少年の非行防止や支援、関連政策のあり方を検討するための重要な基礎資料となります。

日本は第3回調査（ISRD3、2012～2020年）から参加しました。この間、コロナ禍によって研究活動に一定の制約が生じましたが、コロナ禍の収束後は、国内外の学会での報告や学術論文の発表を通じて、研究成果を積極的に発信してきました。さらに、2024年には、それまでの研究成果を取りまとめた『日本の青少年の行動と意識』（現代人文社）を刊行しました。

第4回調査（ISRD4、2020～2025年）では、従来の非行に加えて、インターネットやSNSの利用に関連するサイバー犯罪を新たに調査項目に加えました。また、対象年齢を従来の12～16歳（中学校1～3年生）から14～18歳（中学校3年生～高校3年生）へと拡大しました。約50カ国が参加する国際調査として、デジタル化が進む社会における青少年の新たな非行の実態や特徴を、より幅広い年齢層を対象に国際比較の視点から捉えることが可能になりました。

現在は、ISRD4で収集した日本のデータを分析し、研究成果の発信を進めています。これまでの分析から、例えば、家庭の経済状況や親からの暴力などの家庭環境が少年非行と強く関連しており、複数の問題を抱える子どもほど、非行の加害経験率が高いことが明らかになりました。一方、日本の中学生の非行の加害経験率は国際的にみて低く、日本の犯罪の少なさを理解するうえでも重要な知見が得られています。

今後は、日本の調査成果を国際学術雑誌への論文掲載などを通じて海外にも積極的に発信するとともに、各国の研究者と成果を共有し、国際的な青少年非行研究の発展に貢献していきます。また、すでに準備が始まっている第5回調査（ISRD5）にも引き続き参加し、国際比較を通じて日本の青少年の非行や意識の特徴を明らかにしていきます。

なお、2024年度までは矯正・保護総合センター研究部門の実証研究プロジェクトが日本におけるISRD研究の資金提供・活動拠点を担ってきましたが、2025年度以降は京都大学のE.FORUM（教育研究開発フォーラム）に拠点を移しました。矯正・保護総合センター実証研究プロジェクトも、これまで培ってきた研究基盤を生かし、京都大学と連携しながら、引き続き日本のISRD研究を主体的に推進し、その発展を牽引していきます。

実証研究プロジェクト代表
津島昌弘（龍谷大学社会学部教授）

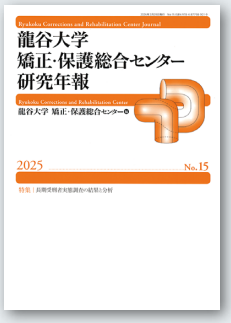
2026年度 矯正・保護総合センター研究プロジェクト

- 刑事立法PJ
  - 矯正・保護立法の現状
  - 犯罪者処遇と市民社会
  - 地域社会と更生保護
- 刑罰理論研究PJ
  - 異文化と刑法に関する研究
- 圍藤PJ
- 実証研究PJ
  - 犯罪・非行調査
  - 再犯防止
  - 少年司法
  - 科学鑑定
- 矯正実務研究PJ
  - 矯正実務（ぎんなん会・桐友会）
  - 宗教教誨

新刊情報

『龍谷大学 矯正・保護総合センター研究年報 第15号 2025年』

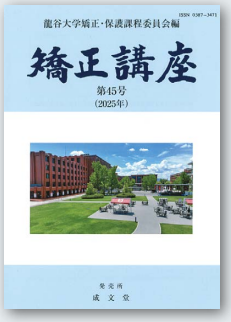
［編集発行者］
龍谷大学矯正・保護総合センター
［発行所］
株式会社現代人文社
［発行日］
2026年2月28日発行



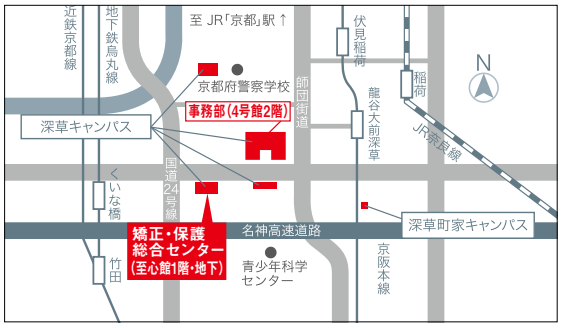
ISBN978-4-87798-901-9

『矯正講座 第45号（2025年）』

［発　行　者］
龍谷大学矯正・保護課程委員会
［編　集　者］
『矯正講座』編集委員会
［発　売　所］
株式会社成文堂
［発　行　日］
2026年3月11日発行



ISBN978-4-7923-3465-9



龍谷大学 矯正・保護総合センター

- 京阪本線「龍谷大前深草駅」下車徒歩約8分
- JR奈良線「稲荷駅」下車徒歩約13分
- 京都市営地下鉄烏丸線「くいな橋駅」下車徒歩約5分

〒612–8577 京都市伏見区深草塚本町67
Tel.075–645–2040　Fax.075–645–2632
URL https://rcrc.ryukoku.ac.jp/
E–mail kyosei–hogo@ad.ryukoku.ac.jp